Chapter4 Speaking

1. Introduction

・スピーキングの研究は、多くの学問分野にまたがるものである。

→心理言語学や、発話産出、形式、意味といった個人間の要素に関連する。

・本章では、スピーキングを階層的なスキルとして見る。本章の目的として、話し言葉(spoken language)は対話や、言語の毎日の使用に関連する特徴を表すという意味において話し言葉(colloquial)としてとらえられる。

2. Aspects of Spoken Language

・体系としての言語と、使用の文脈における言語がある。

・話し手の言語熟達は、現実でそれらを使用する能力としてみなされる。

・情報伝達をするために、話し手はそれらの資源を現実の目的として、または現実の制限の下で利用しなければならない。

・応用言語学のスピーキングモデルはどのように、そして、なぜ話し手は言語の systemic knowledge を現実世界で使用するのかを説明する。

例)：家族の夕飯の会話の録音(p. 64 参照)

→母親の発話には数多くの意図があるということを想定することができる

■注意を引く

■潜在的に興味深いトピックであることをアナウンスする

■親密さを示す

■他の人が聞いていることを示す

・コミュニケーションの内容は、話し手の意図に基づく判断を反映している

・メッセージの構成も話し手の意図に基づく判断に左右されやすい。

3. An Integrated Model of Oral Language Production

・口語産出は、話し手が典型的に行う決定を示す。

・Levelt (1989)や Levelt et al. (1999)の研究において、これらは 4 つの異なったレベルの意思決定の観点でなされる。

①discourse modeling
②message conceptualization
③message formulation
④message articulation

①Discourse Modeling

・スピーキングの際、私たちは数多くの意図を示すための discourse plan を構成しなければならない。

・これらは、人との関係や、自己同一性、そして儀礼的行為などの種類に関連する。

1.異文化間での会話や、様々な文脈において話し手の誤った認知につながる能力において調査されてきた。

例)：仕事場でのコミュニケーション、法廷、家庭教師、医者と患者の会話など

2.口頭での談話の予期されたパターンに関連する。

→研究では、クラス内での会話の構成などを明らかにし、また、文化間の会話の構成と、異文化間の観点における違いを示した。

3.内容の知識

→異なるトピックでコミュニケーションをすることに関連している。

・これらの談話の側面は共同相互行為(joint interaction)を通して話し手によって交渉されるべき。

・話し手のトピックに関する知識は、彼らの話す能力に影響を与える。

・様々な相互行為に参加するために、話し手は自己同一性や関係性についての知識が必要である。その知識とは、談話のパターンにおける知識や、相互行為の知識、そしてトピックの構成における知識である。

・話し手は人と交流する際に、一般的に対話者によって好まれる談話の特徴を特定している。

・談話レベルは話し手に自身の発話計画や、発話者の知識や予測、産出された発話の評価、発話に対する修復が必要かどうかを決定することに対する言及の枠組みを提供している。

②Message Conceptualization

・特定の発話の産出は特定の実用的な目的、文脈、話し手の志向、そして適切な発話行為の概念化(conceptualization)によってなされる。

・このレベルは 2 つの主な理由のために重要である。

1. L1 や L2 産出に我々が関連していようがいまいが、思い(thought)が会話の基礎となるという考え方を考慮に入れる。

2. 話し手がコミュニケーションストラテジーの使用を通じてどのようにコミュニケーションの問題を解決するかという理解に対する基礎を示す。

communication strategy : formulation の段階の一部であり、意味の伝達を即興で行うことに関連している。これは話し手に伝えたいことがすでにある場合にのみ生じる。

③Message Formulation

・formulation は、話し手が意図されたメッセージの内容を伝えるための言語を選択する段階のこと。

・これは話し手の language store にアクセスすることや、相互に関係する決定をすることに関連する。

➢Levelt et al. (1999)における message formulation のプロセス

見出し語(lemmas)の選定
大まかな統語論的枠組みの組み立て
2 語以上からなるアイテムを含む語彙素の選定
文法的語彙素の選定
文法的形態素へのアクセス
↓発話するための音韻の計画の準備

・NS の産出のいくつかの側面は話し手の記憶に基づいている。さらに、多くの決定は短期記憶における rapidly fading trace の使用に基づいている。

・複雑さや時間のプレッシャーはなぜ話言葉が書き言葉よりも理解しにくいのかを説明するのに役立つ。また、休止(pausing)のパターンが、話し手が熟達するにつれて変化するのはなぜかも説明するのに役立つ。

④Message Articulation

・調音(articulation)は formulation の段階で準備される prearticulatory plan の実行に関連する。ここに 2 つのポイントがある。

1. 調音は比較的自動化されている段階である。

・熟達した話し手の調音は自動化されているにもかかわらず、能動的モニタリングへと開かれている。これは子どもに話をするとき、雑音の中話す時に話し手の調音に見られる。

・限界容量モデル(a limited capacity model)は学習者がコミュニケーションをする時に同時に他の問題に直面するとき、発音に対して注意を向けることは難しいということを提案している。そこで、調音スキルは口語産出の階層構造において統合されるべきである。

Monitoring

・前述より、スピーチ産出のすべての側面は能動的モニタリング(active monitoring)に左右されやすいということは明らか。

・正確さ(accuracy)はオンラインのモニタリングを受けやすいという中で実行可能性、適切さ、流暢さに結びつく。

4. Processing Demands and Quality of Performance

Skehan(1998)は、言語を産出する時に、2 つの種類の記憶を使用すると述べている。

①extensive memory store of lexical items…チャンクも含む

②lexico-grammatical repertoire

・話し手は素早い産出に対して自身のアイテムにアクセスすることができ、item store は話し手のアウトプットの流暢さを保つことが出来る。

・新しい発話を収集することは時間がかかるものであり、これは(a)学習者に自分自身のアウトプットの正確さをモニターすることを可能にし、(b)新しい表現の方法を発展させることを可能にする。

・制限容量モデルにおいて、Skehan は流暢さや正確さ、複雑さのそれぞれの側面における努力が他のことの処理をするための能力に影響する。

・P, Robinson(2000)は multiple capacity model を議論した。
…話し手は正確さの欠如なしに流暢さや複雑さを向上させるということを提案。

5. Forms of Oral Language

・スピーチの lexico-grammatical features は考慮されるべき。

・多くのスピーチの状況は 4 つの主な方法で、文法と語彙のパターン化に影響する。

①話し手は自身のメッセージを繰り返したり言い換えたりして、休止の機能の一部を説明するのに役立つ

②スピーチは話し手と聞き手の両方において同時にある

③対話者は出来事の間は両方とも話す権利を持つ

④話し手は、聞き手や相互行為の文脈はスピーチにおいて広範囲にわたる informal さを認める

・これら 4 つの状況はスピーチ同様に、ライティングにも影響する。しかし、スピーチの機能の範囲はライティングのものよりも幅広く、スピーチでは informal end が一般的。

・教育はスピーチの informal な側面も考慮に入れる必要がある。

6. Pedagogy

・言語教授に対する多くのアプローチは大部分がスピーチでは無視されていた。

・スピーチは、最初は L1 を使わずに文法構造を示すための効果的な手法として使用されていた(Direct method)。次に暗記を促進するための方法として。つまり、話し言葉での談話は主に question-answer や written dialogue の使用を通して示される。

・1940 年代の audiolingual approach

→言語はリスニングとスピーキングを通して教えられるべきであるとされていた。しかし、これは会話の相互行為を向上させることの目的とほとんど関連がなかった。むしろ、これは正確なスピーキングは習慣を作ることに関連するという仮説に基づいていた。この

アプローチは発音や文法的正確さを教えたり、記憶を促進させることの方法としての活動として示されていた。

・1960 年代：drill は現実世界のニーズには不適切であるとされ、対話で生じる現実の状況を扱う準備をすることが学習者にとって必要であるとされた。

・1970 年代は audiolingual drills は話し言葉の、形式や機能を教えることに失敗したという点で制限されていて、「機能的」アプローチがより効果的あると提案され始めた。

・audiolingual approach は発音や流暢さ、文法の正確な扱いといった点でのみスピーキングを発達させることを目指した。

・situational approach は教授される特徴において対話のパターンを紹介し、functional approach は syllabus 内に発話行為を加えたものである。しかし、これらのアプローチは相互作用の文法(？)や、特定のスピーチの談話パターンを省略している。つまり、特定のスピーチの”mode”を無視していた。

・communicative approach は正確さだけでなく、学習者の流暢さを発達させることに重点を置いている。

Littlewood(1981)は oral exercise の異なった種類の可能性を述べた。

→precommunicate, communicative, socio-interactional

・これらの発展は補充的なマテリアルとなった。

→ペアやグループワークにおける jigsaw や opinion-gap といったタスクの使用に基づいている

・スピーキングが L2 の状況においてストレスの多いものであるという事実に対して communicative movement は影響を受けやすい。

7. Conclusion

・主な教授や学習の目的は学習者にとって、コミュニケーションするためにすべてのレベルの階層構造を利用することができることである。そして 4 つのアプローチが提案されている。

①口語スキルが lexico-grammatical level において最初に学ばれるべきである。

②学習者が lexico-grammar の特定の側面に焦点を当てることを可能にするために conceptual load(概念的負荷?) が抑制されるべきである。

③流暢さ、正確さ、複雑さといった言語パフォーマンスの異なった側面の間で行われるような文脈を提示するタスクを使用することが出来る

④形に対する注意や、意味に対する注意を向けることの重要性を強調することで、言語形式への注意は、意味のあるコミュニケーションでの文脈内で扱われるべきである。